若草学園内分教室の思い出

湯澤　トヨ（昭和３５~３８年度在職）

昭和３５年に県ではじめての肢体不自由児若草学園が開園されるというので、私は希望をし、９月に細谷小・陽西中の分教室若草学園に勤務をした。

真新しい園舎は、３棟からなり、医療棟・生活棟・教育棟で、医療棟には伊藤園長先生をはじめ、医師・看護婦・訓練士・薬剤師等の方々が活躍され、生活棟では、指導員や保母等の方々が生活全般を担当。教育棟では、小学校４名、中学校４名の教員が指導に携わることになった。

開園まで事前準備期間として、他の施設見学。園内の多くの人々との交流連携、本校との連絡等お互いに共通理解を図ったり、受け入れ態勢を整えることに力をそそいだ。

入園式は、昭和３５年１１月２１日。入園児は、幼児から小中学生あわせて１２名。股関節脱臼や小児麻痺等にかかっている児童たちであった。人とのかかわりあいの少なかった児童たちにとっては、多くの職種の多くの大人たちの働きぶりに囲まれ、驚きととまどいがあったのではないだろうか。

児童たちは、就学猶予児や年齢超過児がおり、学籍係は、事務所と本校と教育委員会との連絡を密にして、前の学校より資料をいただき受け入れに努力した。また、児童の個々の学力の実態を把握し、退園後もスムーズに元の学校で学習ができるようにすることを考え、他の特殊学級と異なった指導法が要求され個に応じた指導の展開がなされた。

昭和３６、３７年と次第に入園児が増加し、重い病気と戦い、健康児ではとても考えられないような生活を経てきた児童と対処するようになってきた。

また、日課の中に治療や機能訓練・水治訓練の時間がはいり、途中呼び出しがあるため授業を進める上で困難をきたしたことがある。

私は、２、３年生の担任になった。大手術をして１０日位でギブスをつけて教室に来る子。車椅子や器具をつけて通って来る子。みんないたわりあって仲がいい。長期間ベッドから離れられない子の所へは、移動黒板を押してベッドサイドに行く。病室は男女別なので、２学年受け持ちの私は、４カ所で授業をするようなことがあった。

M 君は脳性小児麻痺だが意欲的で文字をおぼえようとしているため、何で書かせたらよいか考え、鉛筆・マジック・チョーク・クレョン等いろいろ用意をした。大きな紙に字を書くために持ったクレョンは、１時間で手の中でドロドロになった。また、ある日立てるようになったＭ君は、両手でこぶしをにぎり歯をくいしばって百まで立ちつづけた。感激の場面はこの他数々あった。

はじめての運動会は、昭和３６年１１月１日に学園の庭で行われた。生まれてはじめての運動会ができるとはしゃいでいた子がたくさんいた。おんぶして、手をつないで、ベッドに寝たままで参加した子もいたが、みんなの表情は明るくいつもより身体が軽くなったように動きまわる姿は素晴しく、青空のもとに輝いていた。

ころぶと私の指１本をたよりに立ち上がったＩＩさんは編物の研究。東京に時計の技術を学びに行ったＳ君は時計やさんの専務。市役所や役場で大活躍のＩ君。重度心身障害者施設の事務長のＹ君。音楽の先生のＴさん。社会に出てくじけてはと心配していたが障害を克服し進み行く姿を見、非常にうれしい。

はじめての運動会

『歩み誌』（平成３年３月発行）より